慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	〈巨人の肩の上に乗る矮人〉：ソールズベリのジョンの思想世界
Sub Title	On the Shoulders of Giants : The World of John of Salisbury
Author	柴田, 平三郎(Shibata, Heizaburo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1997
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.70, No.2 (1997. 2) ,p.97- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	奈良和重教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19970228-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈巨人の肩の上に乗る矮人〉

――ソールズベリのジョンの思想世界

柴田平三郎

序
Ⅰ ソールスベリのションの修業時代――『メタロキコン』Ⅱ, 10の解釈問題
Ⅱ 『メタロキコン』の成立――十二世紀前半の知的状況
Ⅲ 言葉と理性――『メタロキコン』の教養理念
Ⅳ 人文主義の理念――古典愛好と〈中庸〉の精神
結

自由意志と宿命とに関わらず、神と悪魔、美と醜、勇敢と怯懦、理性と信仰、――その他あらゆる天秤の両極端にはこういう態度をとるべきである。古人はこの態度を中庸と呼んだ。中庸とは英吉利語のgood senseである。わたしの信ずるところによれば、グッドセンスを持たない限り、如何なる幸福も得ることは出来ない。もしそれでも得られると

すれば、炎天に炭火を擁したり、大寒に団扇を揮ったりする痩せ我慢の幸福ばかりである。

芥川龍之介『侏儒の言葉』

序

十二世紀西欧世界が生んだ、傑出した人文主義者ソールズベリのジョン（John of Salisbury, ラテン名 Johannes Saresberiensis, 1115/20-80）は齢四〇歳頃に執筆した『メタロギコン』[1]（*Metalogicon*, 1159）のなかで、若き日の自分の修業時代を振り返り、次のように述べている。

「シャルトルのベルナルドゥスは我々をよく巨人の肩の上に乗っている矮人に準えたものであった。我々は彼らよりも、より多く、より遠くまで見ることができる。しかし、それは我々の視力が鋭いからでもなく、あるいは、我々の背丈が高いからでもなく、我々が巨人の身体で上に高く持ち上げられているからだ、とベルナルドゥスは指摘していた。私もまったくその通りだと思う。」（III, 4）

〈巨人の肩の上に乗っている矮人〉（*Nani gigantum humeris insidentes*）――シャルトル学派の総帥ベルナルドゥスの語ったこととして、ジョンによって伝えられたこの言葉は、今日ではその出所の問題は人々の関心をほとんど引かず、その抜群のイメージ喚起力だけが一人歩きしているようだ。一例をとろう。わが国でも比較的最近、『巨人の肩の上で』[2]というタイトルの書物が公刊されているが、そこでは著者は現代の社会科学者たちがおしなべてマックス・ウエーバーという巨人の肩の上に乗る小人にすぎないという意味を込めて、この言葉を使用している。

もっとも、巨人―矮人というこのメタファーが最初にそれを世に知らしめた人間の意図とは無関係に、広く知の世界に流布し始めたのは実は相当に古く、ルネサンス以降のことだとされる。そしてとくに、それは一七世紀の終わりから一八世紀初頭にかけてその頂点に達するいわゆる新旧論争もしくは古代・近代論争と呼ばれる論争を通じていくたびか古代人と近代人〔当時における現代人〕の優劣如何を問うという形での格好の言語表現として引用されてきた。例えば、現今の最も信頼に足る欧米の思想史事典でこの問題を担当したある学者はこの点について次のように書いている。

「巨人―小人のイメージは、小人としての近代人を肩の上に乗せた巨人に古代人を喩えたものである。そのために近代人は自然をより有利な立場で見晴らすことができるというのである。その比喩が際立っているのはルネサンス期のスペイン人ファン・ルイス・ビーベス（1492-1540）の著作においてであった。ベン・ジョンソン（1572-1637）もそれを用い、フォントネルが改めて持ち出した。このイメージもまた、論争の両陣営が自説を支持するものとして使用することができた。古代派は近代人である小人のみすぼらしい姿を衰退の徴であると解釈し、近代派はその有利な立場を、近代が知識において優れていることのシンボルとみなしたのである。[3]」

このように、巨人―矮人の比喩が興味深いことに、ルネサンス以降、古代派・近代派双方の議論のなかで、ともに自己の主張の優位性を示すものとして使われてきた次第がわかる。この両者の論争がその後どのような展開をみせたのか、そしてまたそれが最終的にいかなる決着を示して現在に至っているのか、といった点については別の機会に譲ることにしよう。[4] それよりも、いま私たちが知りたいと思うのは自分たちを〈巨人の肩の上に乗る矮人〉と称したベルナルドゥスの発言に深い共感の念を抱き、それを後世に伝えようとしたソールズベリのジョン自身にとって、その言葉は一体、どのような切実な意味をもっていたのか、という問題である。

I　ソールズベリのジョンの修業時代――『メタロギコン』II, 10 の解釈問題

まずジョンの前半生、つまり彼が時の教皇エウゲニウス三世に随行しフランスのランスで開かれた教会会議（一一四八年）に出席することによって初めて公の歴史舞台に登場するまでの知的修業時代を振り返っておこう。ジョンはおそらく一一一五年から一一二〇年の間にイングランド南部のソールズベリ――この地は遠く「古いサレム」（*Old Sarum*）という意味のローマの地名に由来する――近郊に生まれた。彼自身の語るところによると、[5] 幼年時代、彼は小柄で短軀であったため、"*parvus*"（*little or short*）とか、"*Johannes Parvus*"と呼ばれていた。父親については何もわかっていないが、母親については一一七〇年までは存命であったこと、またリチャード（リカルドゥス）という兄弟と、ロバート（ロベルトゥス）という、おそらく異（父）母兄弟のいたことが彼の『書簡』[6] から知られる。そのほか少年時代のことは「司祭のもとに『詩編』を学ぶために連れて行かれた」[7] という以外にはほとんどわかっていない。

これに対し、それから以後の修業時代のことは『メタロギコン』の第二巻第一〇章における彼自身の詳細な自伝的記述によって十分な情報が得られる。この箇所は次のように始まる。

「まだ少年であった私が、勉学のために初めてガリアに行ったとき、それはイギリス人の誉高き王、正義の獅子王ヘンリー〔1世〕が崩御された翌年のことであったが、私は当時サント＝ジュヌヴィエーヴの丘にいた、高名で誰からも称賛されていた教師であるパレの逍遙学派の徒〔アベラルドゥス〕のところに赴いた。彼のもとで私は、この学芸（ars）〔論理学・弁証論〕の基本を学び、夢中でむさぼるように、師の口から出るすべての言葉を乏しい能力のありったけを絞ってつかみとった。」

ヘンリー一世が没したのは一一一五年のことであるから、ジョンがイングランドを立ち、パリのセーヌ左岸の

丘の上にあるサント＝ジュヌヴィエーヴの学校で教えていたアベラルドゥスのもとに行ったのは一一三六年、彼が一六歳から二〇歳ぐらいの年齢であったということがこの叙述から明らかになる。

ところで、このアベラルドゥスはある事情によりサント＝ジュヌヴィエーヴの丘を去ることになる。ジョンにとって、「そのことはあまりにも早すぎると思えた」が、彼自身はなおこの丘にとどまり、「最良の弁証論者と評判の高かった」アルベリクスと、「イングランド生まれ」のムランのロベルトゥスに就いてまる二年、弁証論（*dialectica*）を学んだ。その結果、「この学科〔弁証論〕を徹底的に学んだので、若気のいたりで軽率にも、自分の知識を実際以上に値打ちのあるものと考えた。私は呑みこみの早いこともあって自分がいっぱしの少壮学者であるかのように思い込んだ。」

だが、ジョンはほどなく自己の高慢に気づき、正気に立ち返る。

「私はふと我にかえり、自分の能力をはかって熟慮の末、師たちの好意によって、コンシュの文法学者〔ギヨーム〕のもとに移った。そして三年間、そこで講義を聴いた。その間に学んだことは多く、私は永久にこの時のことを忘れはしないであろう。」

ところで、ジョンはこのときサント＝ジュヌヴィエーヴの丘を降りて、何処でコンシュのギヨームに教えを受けたのだろうか。見ての通り、ここでジョンはただ、「コンシュの文法学者〔ギヨーム〕のもとに移った」（*ad grammaticam de Conchis transtuli*）と、述べているだけで、「シャルトルへ行った」とは実は一言も語っていない。ところが、シャールシュミット[8]（一八六二）やR・L・プール[9]（一八八四、一九二〇）、クレルヴァル[10]（一八九五）、ウエッブ[11]（一九二九、一九三二）らジョン研究の草分け的な学者たちの間では、この箇所はジョンがサント＝ジュヌヴィエーヴからシャルトルへ移ったと解釈するのが正しいとされてきた。この解釈はウエッブによる『メタロギコン』の校訂注釈書[12]（一九二九）や、マクガリーの英訳書[13]（一九五五）も認めているところであるが、C・

H・ハスキンズの『十二世紀ルネサンス』[14]（一九二七）がこの箇所を全面的に紹介したことで、人口に膾炙したように思われる。そこで、ハスキンズは上掲の引用文のすぐ後に続けて、「〈その間シャルトルでジョンは司教リカルドゥスにも学んだ〉」という、原文にはない言葉をわざわざ挿入している。

しかるにその後、イギリスの歴史家、R・サザーン[15]（一九七〇）によって、従来のこの通説に対する異議が提出された。彼によれば、ジョンが向かったのはシャルトルではなく、実はパリ――当時はサント＝ジュヌヴィエーヴはパリではなく、パリ市壁の外側（現在のソルボンヌ付近）に位置していた――であって、そこでコンシュのギヨームに就いて学んだのである。そればかりか、そもそもジョンがシャルトルで学んだ形跡も認められないという。

サザーンはシャルトルの司教座聖堂学校で教授し、いわゆる〈シャルトル学派〉と呼称される学派を形成するとされる四人のマギステル（教師）たち――すなわち、この学派の総帥シャルトルのベルナルドゥス、その兄弟ティエリ、コンシュのギヨーム、ギルベルトゥス・ポレタヌス――の足跡を厳密な史料批判に基づいて明らかにしている。その結果、シャルトルで教授し、なかんずくそこでの文書局長（カンケラリウス）として活躍したのが確証されるのはベルナルドゥスただ一人にすぎず、他の三人の実際の教授の場はいずれもシャルトルではなく、パリにほかならないというのである。

このようなサザーンの見解を一体、どのように受けとればいいのだろうか。確かに、〈シャルトル学派〉という存在を、シャルトルの司教座聖堂学校という機構・制度・組織や、そこでのマギステルと学生との関係のあり方という関連枠組みで明らかにしたのはサザーンの否定できない功績であろう。しかしながら、サザーンの研究が究極的にはシャルトルの司教座聖堂学校（*schola*）を中心に花開いた、いわゆる〈シャルトル・ヒューマニズム〉の存在の軽視ないしは過小評価と、その後景に大きく広がる西欧十二世紀の文化――〈十二世紀ルネサン

ス〉と言い換えてもよい――におけるパリの存在、とりわけ新しく台頭してきた知の磁場たる「大学」（*universitas*）に対する過大評価に係わるものであることを想起するとき、問題の本質はさほど簡単ではないと言うべきである。

だが、その点の問題性については、のちほど触れることにしよう。拙論の展開をもとにもどしたい。『メタロギコン』（II, 10）の自伝的叙述をジョンはさらに、どう続けているのだろうか。コンシュの文法学者ギヨームのもとで講義を聴いた三年の間、彼はまた司教リカルドゥスに出会い、四科を学び、ティエリ（シャルトルのベルナルドゥスの兄弟）とペトルス・ヘリアスから修辞学（*rethorica*）を学んだという。

「リカルドゥスはあらゆる知識に通暁し、言葉よりも心を、巧みさよりも知識を、虚栄よりも真実を、見かけよりも徳をもっていた。それで私は、他の人々から学んだことを彼から改めて学び直した。また、かつて私がドイツ人ハルドウィンから手ほどきを受けたことのある四科に関して、以前には学ばなかったことをいくらか学んだ。修辞学も学んだが、それは師ティエリに教えられていたときにはほとんど理解できなかった。その後、ペトルス・ヘリアスからもっとしっかりと学んだ。」

ジョンはこの間また、「非常に鋭い機知に富み、アリストテレスを研究中の著名な師プティ・ポンのアダム」とも親交を結ぶが、一方、経済的逼迫や友人の助言もあって教職に就く。そして、「三年後に戻ってきて、師ギルベルトゥスを見いだし、論理学（*logica*）と神学の講義を聴いた」。ところが、そのギルベルトゥスはすぐに立ち去り、その後任ロベルトゥス・プルスと、ポアシーのシモンにそれぞれ神学（*theologica*）を学ぶことになる。そして、ジョンは次のように語っている。

「こうして、さまざまな勉学に携わるうちに、十二年ちかくの歳月が経ってしまった」。

故郷イングランドのソールズベリを後にしてフランスに渡って以来、すなわち一一三六年から一一四八年にか

けての、実に十二年間におよぶ、ジョンのかけがえのない、青春の知的修業時代がここに終わりを告げることとなった。だが、彼の自伝的叙述の総括はここで終ってはいない。では、彼は十二年をかけた知的・学問的遍歴の成果をどのように自己総括しているのだろうか。

II 『メタロギコン』の成立——十二世紀前半の知的状況

『メタロギコン』第二巻第一〇章の末尾で、ジョンは十二年間の勉学を終えた後、「以前に別れた仲間たちに再会するためにサント＝ジュヌヴィエーヴの丘をもう一度訪ねてみれば、さぞかし楽しかろうと思って」、そこを訪ねてはみたものの、その結果はけっして好ましいものではなかったと述懐している。すなわち、彼らはといえば、相も変わらず「弁証論」にしがみついているばかりで、なんの進歩もなく、変わっていたのはただ一つ、「恢復を望めないほどに節度を捨て去り、慎みを知らなかった」ことだけだ、と。そして、次のようにこの章を結んでいる。

「弁証論（*dialectica*）は他の諸学問を促進しはするが、もしそれがそれだけにとどまっているだけならば、弁証論は血もかよわぬ不毛なものである。魂を揺すぶって哲学の果実（*fructus philosophiae*）を生み出そうとするなら、それは他の学問から考えを得なければならない」。

ここに見られるように、他の基礎的な学問を無視して弁証論にのみよりかかり、不毛な議論に明け暮れするソフィスト的弁証論者たちに対して、ジョンはつよい批判をぶつけている。このとき、彼の脳裏には弁証論の真の価値と限界を弁えず、これさえ身につければ、向かうところ敵なしと自惚れる若き日の自分の姿が二重映しになっていたにちがいない。青春の十二年間を諸学芸の修得、すなわちより具体的に言えば、文法・修辞学・弁証論

の三学と算術・音楽・幾何学・天文学の四科のいわゆる七自由学芸[16]のうち、とりわけ前者の三学を中心に人文諸学の修得に費やした彼の眼には、文法や修辞学の基礎的で、地道な、時間のかかる学習をなおざりにするだけでなく、それらの学知を莫迦にして論証と形式の首尾一貫性のみに拘泥するソフィスト的弁証論者たちの言辞はたんなる議論のための議論に終始する不毛な論争術であり、空虚な詭弁でしかなかった。

「この時代の哲学者たちはだらだらとこんな問題について論じ合っていた。市場に引かれて行く豚（porcus）は人（*homo*）が引いているのか、それとも綱（*funiculus*）が引いているのか、そしてまたマント（*capucium*）を買う人は同時にフード（*cappa*）も買うのか、と。」（I, 3）

こうジョンは『メタロギコン』の他の箇所で痛烈に彼らを揶揄しているが、当時の事態はけっしてそうした揶揄ですむ話でないことは彼自身がよく知っていた。

「弁証論以外のすべてを軽蔑し、文法（*gramatica*）も自然学（*phisica*）も倫理学（*ethica*）も同様に知らないこれらのたんなる哲学者（*puri philosophi*）たちはますます居丈高になってきて、私を邪悪な者（*improbus*）、愚鈍な者（*obtusus*）、頓馬（*caudex*）、石頭（*lapis*）と非難する始末である。」（II, 6）

さて、十二年間の知的修業時代を通じて思想形成をおこなっていったジョンの前に立ちはだかっていたのは、なにもソフィスト的弁証論者たちだけではなかった。そこにはまた、たとえ十二世紀の自由な知的雰囲気のなかでさえ、異教の古典的著作に対する本能的な嫌悪と猜疑の感情が保守的な聖職者層の間に広く存在していた。彼らにとっては、そもそも自由学芸に携わること自体が信仰に相応しくない行為であり、ラテン語の学習のために古代作家の作品を読むことは危険でさえあったのである。[17]そうしてさらに、ジョンにとってもっと直接的な論敵はいわゆる「コルニフィキウス」（*Cornificius*）の存在であった。

「私はコルニフィキウスのことを包み隠さずに実名で呼ぶであろう。そして、公衆の前に、彼の心身の腫瘍、淫らな

口先、貪欲な手、無責任な振る舞い、悪しき習慣（彼についてすべてが吐き気を催させる）、汚れた肉欲、醜悪な風貌、邪悪な生活、芳しくない評判について、すっかり明らかにすることであろう。もしもクリスチアン・ネームに対する尊敬の念にこだわるところがないとするならば。だが、私の信仰と主における兄弟の交わりの気持ちから、私は罪を憎んで人を憎まずの精神で臨むのが良いことと考えた。」(I, 2)

この「コルニフィキウス」とは一体、誰を指すのか、については諸説あるものの、現在にいたってもよくわかってはいない。[18] 名前自体は中世に流布していた『ウェルギリウス伝』(*Vitae Vergilianae*) にでてくる登場人物で、ウェルギリウスに対して誹謗中傷する者の名から採られたと考えられる。[19] しかし、ジョンが『メタロギコン』で批判しようとしていたのはたんに一コルニフィキウスではなく、教師であれ同僚であれ、聖職者であれ修道士であれ、ともかくこのコルニフィキウスに追随している一群の者たち――ジョンは彼らを「コルニフィキウスの徒」[20] (secta) と呼ぶ――であったので、この人物の詮索はさして意味があるとは思えない。

「コルニフィキウスが高額の報酬で雇われ、長い間にわたって得々と弁じていながら、信じやすい聴講者たちに何も教えてこなかったといっても、私は全然驚きはしない。というのも、それは彼自身が自分の師たちによって同じように『教えられなかった』からだ。雄弁などというよりもむしろ冗長なだけで、彼はただ意味の果実を欠いている言の葉を風に向かって撒き散らし続けているだけだ。一方で、彼は人の言うことをその人が誰であろうと、お構いなしにただただ自分の意見を正当化し、他人の意見を打ち負かそうとしていぎたなく責め立てる。それでいて他方では、彼はうまく立ち回って摑み合いの喧嘩になるのを避け、自分の主張を理性の上に置き、聖書に従ってともに歩もうとすることを忌避するのである。」(I, 3)

ジョンのコルニフィキウスに対する批判は、このように辛辣を極めている。ジョンによれば、こうしたコルニフィキウスの影響を骨絡みに受けて少しも怪しまない多くの人間たち、つまりコルニフィキウスの徒によって蹂

躙されようとしているのが十二世紀中葉の知の世界の実際であった。「新しいコルニフィキウスが古いコルニフィキウスよりも賢いわけではないという事実にもかかわらず、大勢の愚か者たちの群れが彼に追随している」(I, 2) のである。

ジョンの眼に映る彼らの姿はまずもって、ものごとを真面目に考えようとする気持ちなどさらさらなく、エロクエンティア（表現＝雄弁術）や文法など自由学芸を学習する意義を端から認めようとはしない怠惰で傲慢な態度である。

「エロクエンティア (*eloquentia*) を学ぶことを否定する者の本当の狙いは何なのか。それはちょうど盲人 (*caecus*) でなければものが見え、聾者 (*surdus*) でなければものが聴こえるように、唖者 (*mutus*) でなければ生まれつき〔自然によって〕(*a natura*) 人間に具わっているなどと主張する者の真の狙いは何なのだろうか。」(I, 1)

言葉は人間に具わっている生来の能力だから学ぶ必要はないとするコルニフィキウスの徒にしてみれば、地道で忍耐のいる努力を通して学知の修得に志すことなどナンセンスの極みということになるであろう。彼らは「怠惰で放恣であり、叡知ある者であるよりも、そうであると思われることを望んでいる」(I, 2, 24) にすぎない。したがって、学問に従事するとしても手っ取り早く、短時間のうちにこれを修得できるとし、そうして人々をいとも簡単に哲学者にさせてみせるとさえ彼らは豪語していた。[21]

そればかりか、彼らのなかには学芸を営利事業とみなす者まで出る始末なのである。

「彼らはたった一つのことしか関心がない。『できれば公正な手段で、それがだめならどんな手段でもよいから金 (*pecunia*) を儲けること』である。……叡知の唯一の果実は彼らにとっては、富 (opes) しかないのだ。」(I, 4)

これが十二世紀中葉の世界において知的であるべき人間たちの、ジョンの眼に映った真の姿であった。青春の十二年間を文字通り諸学芸の修得のために費やした彼にとって、こうした知の世界の現状と人間模様はとうてい

容認できるものではなかった。長い年月をかけて忍耐つよく学ばねばならぬ基礎的な自由学芸と人文教育を鼻先でせせら笑い、ごく短時間の速成の教育で専門知識を修得すれば事足りると公言して憚らぬ彼らコルニフィキウスの徒やソフィスト的弁証論者たちのあまりにも技術主義的な学問・教育観は、ジョンの学んできたそれの対極にあったと言ってよい。事態はもはや堕ちるところまで堕ちたと、ジョンには思われた。

「後になって、一般の意見が真理から逸脱し、人々は哲学者であるよりも、そう見えることを好むようになり、そうして学芸の教師たちが二、三年以内に哲学すべてを与えると約束するにいたって、ギヨームとリカルドゥスは無知蒙昧な連中の猛攻に翻弄されて引退するはめになった。」(I, 24)

改めて注意を喚起するまでもないことであるが、ギヨームとは文法学者のコンシュのギヨームのことであり、リカルドゥスは司教として著名な人物である。ジョンはこの二人の卓越した師から知的修業時代にたんに学問の教えを与えられていただけではなく、それを通して深い人格的な影響を受けていたのであった。しかし、ジョンにとって、事態の深刻さは私的な感傷に耽ってばかりはおれないものでもあった。なぜなら、彼の意識においては、彼の敵対者たちの存在は次のような坐しては通れぬ深刻な危惧を抱かせていたからである。

「エロクエンティアにかかわる研究に無知で邪悪な敵対者たる我らのコルニフィキウスは、たんに二、三人の人たちを毒しているだけではなく、すべての都市と政治生活をも毒しているのである。」(I, 1)

Ⅲ　言葉と理性――『メタロギコン』の教養理念

全四巻全九七章[22]からなる『メタロギコン』はこうして、なによりも自己の「敵対者」(*adversarii*) コルニフィキウスの徒をつよく意識して書かれた自由学芸擁護の書にほかならない。

「私はこの論稿のなかに意識して倫理（*mos*）に関する若干の考察を織り込んだ。というのも読まれること、書かれてあることのすべては、それが何か人生の支え（*adminiculum vitae*）にならないならば、無益であると確信しているからである。そしてすべての哲学的見解も、それが徳の涵養（*cultus virtutis*）や生の営み（*vitae exhibitio*）のなかに関連をもたなければ、無益であり偽りだと思うからである。」（prologus）

これは『メタロギコン』全巻の「序文」のなかに書かれた言葉であるが、ここにジョンの学芸・教育思想のエッセンスが明白に表明されている。彼にとって、すべての学芸（「読まれること、書かれてあることのすべて」）はそれが人間の生の基本的あり方に関係する（「人生の支え」）ときにはじめて意味をもつ。具体的には「徳の涵養」であるが、そういう人の生と深いところでの結びつき（「生の営み」）を欠く学芸などその名に値しない。そう彼は言っているのであろう。ジョンには、学芸修得の究極の意味は、それを通して人間が徳という「生の営み」における最高の倫理的価値へと近づいていくことにあったと言ってよい。そしてそうであればこそ、およそその学芸の基点にほかならぬ「言葉」（*verbum*）とは何か、という問題は彼にとって、抜き差しならぬ深い意味をもっていたのである。

このことはそもそも『メタロギコン』という書物そのもののうちに明らかである。書物にギリシア語風の題名をつけることは十二世紀に流行したやり方[23]——彼のもう一つの大書『ポリクラティクス』も同様に——であるが、この書もそういうわけで「メタ μετὰ」（*about for, on behalf of*）＋「ロギコン λογικῶν」（*logic, logical studies*）の合成語として「論理学擁護の書」の意を込めて、ジョンによって考案された。この場合、ジョン自身が説明しているように[24]、この λογικῶν（ラテン語の logica）＝論理学とは狭義には論証の理論としての弁証論を指し、広義には表現と論証の理論としての自由七科のうちの文法、修辞学、弁証論の三学と同義であり、一般に「言葉に関する理論」を意味している。このように、ジョンにおいては、論理学が両義性をもって語られていることは大

事なポイントであるが、それを意識しつつこの書の全体の構成を見てみれば、次のようである。[25]

全体の「序文」：序論
本書の動機、目的および全体の性格
第一巻：三学と文法
三学：三学に対する不当な攻撃：自由学芸における三学の本質、効用およびその位置の重要性
文法：その本質、内容および効用、その学び方・研究方法
第二巻：論理学：全体的的考察
論理学の起源、本質および効用、その学び方・研究方法
第三巻：論理学（続き）：内容
ポルフュリオス『アリストテレスのカテゴリー論入門』
アリストテレス『カテゴリー論』
同『命題論』
同『トピカ』
第四巻：論理学：内容（続き）および真理
アリストテレス『分析論前書』・『分析論後書』
認識：その機能、作用、対象と基礎
条件的推論
詭弁的推論とアリストテレス『詭弁論駁論』
アリストテレス「オルガノン」の学び方・研究方法
人間の最終目標としての、感情的・推論的・実践的真理

この構成を見ると、第一巻が三学と文法、第二巻以降が論理学（弁証論）を扱っているのがわかるが、とりわけ注目されねばならないのは三学における文法の重視であろう。ジョンによれば、文法（*gramatica*）は「すべての自由学芸の出発点」（I, 13）にして「すべての研究の母と乳母（*mater et atrix studii sui*）」（I, 17）であり、「正しく語り書くことの学」（I, 13）にほかならない。そして、この文法の習熟なくしては、実は「真偽を弁別し、いかなる論法が論争において確固たる証明となりうるか、いかなる論法が説得力をもつか」（II, 2, 3）を教える弁証論の修得もおぼつかないというのである。

そこに見られるのは、シャルトル学派の総帥ベルナルドゥスがシャルトルの司教座聖堂学校でおこなっていた文法の徹底した教授方法とまさに同一の精神であろう。ジョンはその教授法を次のように書いている。

「シャルトルのベルナルドゥスは、近年におけるガリアにおける文学研究の豊かな泉（*exundantissimus modernis temporibus fons litterarum*）であるが、次のような方法で文法を教えるのが常であった。彼は著作家たちの作品を読む場合、平易なもの、一般的規則に従うものを指摘した。他方で、彼は文法的姿詞、詭弁的こじつけを明らかにし、彼自身の行う授業が他の教材とどのような関係をもっているかを説明した。……また訓練は記憶力を高め、機知を鋭くするので、彼は生徒たちに、読んで聞かせたことを模倣する練習をさせるようあらゆる努力を傾けたが、時にはある者に注意を与え、ある者には鞭打ちや罰を与えた。誰もが毎日、前の日に聞いたことの一部を、ある者は多く、ある者は少なく、暗唱するよう求められた。というのも、彼らにとって翌日は前の日の弟子であったからである。デークリナーツィオーと呼ばれる夕方の訓練で、生徒たちは非常に多くの文法を詰め込まれたので、それをまる一年間行った者は、ひどく頭が悪くない限り、話したり書く方法を自由に使いこなせるようになり、一般に用いられている表現の意味を会得せずにはいなかった。……彼は、散文や詩文を模倣する初歩的練習で、少年たちに手本として役立つ詩人や弁論家たちの作品にも説明を与えた。そして、こうした人々の足跡を見習うよう命じ、彼らの言葉の組み合わせや言い回しの美しさを指摘した。」（I, 24）

文法をたんなる語学と見なす近代人の感覚をもってしては、十二世紀中世の教養学としての文法の意味は到底把握しえない。シャルトル学派にとっての、したがってジョンにとっての、文法とは三学すべての学が相互に密接に結びつく教育・教養の理念のなかに位置づけられるものであり、たんなる文法の規則や三段論法といった形式的な技術的問題を扱う実習手段が文法なのではない。[26] 人は文法の「訓練」のなかで「散文」や「詩文」、「弁論家たちの作品」など古典文芸を教材として「正しい読解」だけでなく「美しい、優雅な文体」の鑑賞と獲得をめざす広い人文教育をほどこされる。そして実は、教材たる古典の精読は美的享受と同時に、それを通して高い人格の完成へと人を促すものとされているのである。

ジョンによれば、「万物の最も優しい母にして賢明な指導者たる自然」(I, 1) は、他の被造物のもたない「理性の特権」(*privilego ratio*) と「雄弁（言葉）の使用」(*usus eloquii*) を人間にのみ与えたが、この「言葉」(*verbum*) と「理性」(*ratio*) の二つの能力のゆえに、人間は「真の幸福」(*vera beatitudo*) に達することができる。そして、「およそいかなる種類の幸福も人間相互の結合から離れては存在しえず、人間社会 (*humana societas*) の外にも存在しえない」以上、この人間社会の絆である言葉と理性を愚弄する者は「幸福への道を遮る」者なのである (I, 1)。

「かくも多くの際立った都市 (*urbes*) を生み出し、かくも多くの王国 (*regna*) に友国や同盟国をつくり、かくも多くの人民 (*populos*) を愛の絆のうちに親密に結合せしめてきたのは、理性と言葉のこの悦ばしくも実りある結合にほかならない。公共善 (*utilitas omnium*) のために『神が一つの軛におつなぎになったものを引き離そうとする』者は、公共の敵 (*hostis publicus*) と言わねばならない。雄弁術 (*eloquentia*) を哲学研究 (*studia philosophiae*) から締め出す者は、メリクリウス〔*Mercurius* 雄弁の守護神〕を文献学〔*Philologia* 叡知の女神〕の腕からもぎ取る者である。彼はひとり雄弁術のみを攻撃しているようではあるが、実は全自由学芸研究 (*omnia liberalia studia*) を傷つけ根絶

やしにし、哲学の全てを攻撃し、人間の社会的結合をずたずたに裂き、兄弟愛と奉仕の相互交換を破壊するのである。」(I, 1)

右の言葉にくだくだしい解説を付け加えるのは、もはや蛇足というものであろう。言葉と理性とは一体となって人間の醇風美俗をなし、社会の基礎を形作る、とする観念が直接的にはローマの文人キケロの教え――さらにギリシアのポセイドニスとイソクラテスにまで溯る教え――であることは研究者の間ではつとに知られている通りであるし[27]、「メリクリウスを文献学の腕からもぎとる」という表現が五世紀初頭の異教の哲学者マルティアヌス・カペラの有名な自由学芸科目の教科書『文献学とメリクリウスの結婚』[28]を下敷きにしていることも改めて指摘するまでもない。ただ、ここで大事な点をあえて再確認すれば、ジョンにあって「言葉」と「理性」はそれぞれ別個のものではなく、あくまでも相互に一体として考えられていることである。すなわち、

「知と徳の生みの親（*scientia virtutumque parens*）であり乳母（*altrix*）である理性は、しばしば言葉から発想を得て、言葉を通じてより豊かな成果を生むのである。」(I, 1)

「言葉の使用によって進まない理性は、脆弱であるだけでなく、ある意味では不具でもある。」(I, 1)

こうして、ジョンにとって「言葉」を磨くことはすなわち「理性」を研ぎ澄ますことであり、それはさらに「知」と「徳」へと接近することを意味していた。彼が文法をなによりも重視し、それを自由学芸の基本に据えていたのはまさにそのためにほかならない。そうして、その文法の重視の目指す先には、人が人として立派な人格になるという究極の目的があったのである。

「学知の基本であり根である文法は、いわば恩寵が大地に準備した後の自然の溝に蒔かれた種子のようなものだ。この種子は恩寵のつづく限り、堅固な徳（*virtus*）の力に成長し、豊かな果実を生み出し、名実ともに立派な人（*boni viri*）を作り出す。」(I, 23)

Ⅳ　人文主義の理念——古典愛好と〈中庸〉の精神

言葉から理性へ、理性から知と徳へ、そうして高い人格の完成へとジョンの学芸修得の段階と目的が想定されているのを見てきたが、ダニエル・D・マクガリーはこのジョンの学芸論を“*idealistic*”な教育論と見て、その特徴を次のように分析している。[29] すなわち、ジョンにとって、教育の目的はまずもって理性の開発にあるが、理性は真理の探究をその目的にしなければ、なにものでもないことになる。つまり、この真理の探求が理性を媒介とする教育の目的ということになるが、その真理認識は三つの段階、（一）感覚と想像力から派生する意見（*opinion*）、（二）理性に基づく学知（*science*）、（三）知解によって得られる叡知（*wisdom*）、に区分される。そして、この三段階を経て叡知が獲得されたとき、真理の完全な理解が達成されることになる。したがって、教育の最高目的はたんなる学知の修得を越えて、この叡知の獲得を目指さねばならないのである。ジョンも言う。

「あらゆることのなかで最も望ましいのは叡知（*sapientia*）であり、その果実は善性への愛（*amor boni*）と徳の涵養（*virtutum cultus*）である。それゆえ精神は叡知の探求にむかわねばならず、個々の場合に正しい判断ができるように十分に究めねばならない。」（II, 1）

確かに、ジョンにとって、学芸・教育の究極目的は個々の学科のたんなる修得にあるのではなかった。それは諸学芸の修得から得られる学知（*scientia*）を越えて人間として叡知（*sapientia*）を求めること、言い換えれば物事に対する正しい判断を誤ることなく下せるような高い識見と徳とを身につけた人格（*persona*）を養うことだった。

「たんなる哲学者（*soli philosophi*）は、立派な人びと（*boni viri*）ではない。」（I, 22）

と、ジョンはセネカの言葉を引用しつつ語っている。

さて、あくまでも言葉にこだわり、言葉に身を寄せて表現の問題と格闘したジョンにとって、学ばれるべき第一の基本的学科は文法であった。文法はその修得によってたんに言葉の規則や秩序、表現の方法を身につけるといった形式的、技術的な訓練に尽きるものではない。彼によれば、それは端的に「哲学の揺り篭（*cunabula*）」（I, 13）であって、叡知の探求と徳の涵養、人格の陶冶を目指す幅広い人文主義的学芸・教育の基礎そのものにほかならなかった。そして、その文法の基本教材となるのが、聖書であり、キリスト教文献であり、なかんずくラテン語古典であった。

基礎的な文法の徹底的な修得を通しての古典学芸の復興、それは十二世紀のシャルトルの司教座聖堂学校が他の学校に抜きん出て目覚ましく行っていたことであった。若いジョンもまたそうした古典学習中心の学風のなかで、その人文主義的な教養を磨いていった。ハスキンズはジョンを「シャルトルの学校が生んだ最も豊かな成果[30]」と言い、プールは「古典の読解の広さと深さという点では、どんな中世の著作家も彼と肩を並べられる者はいなかった[31]。」と、述べている。

ところで、こうしたいわゆる「シャルトル学派」の存在を否定ないし過小評価する所論が一九七〇年に、サザーンによって打ち出されたことは、上述しておいた通りである。サザーンはそこで、十九世紀の末にイギリスのプールとフランスのクレルヴァルによって確立し、ハスキンズによって今世紀に人口に膾炙したシャルトル像――すなわち、新しい知の中心＝大学を拠点に活発化するパリの論理主義に対して、古代末以来の自由学芸の伝統にのっとり、司教座聖堂学校で営まれる古典愛好にもとづくシャルトルの人文主義――に根本的な異議を申し立てている。彼によれば、そもそも「シャルトル学派」と言うが、シャルトルで実際に教授したことが確証されるのは一人ベルナルドゥスだけであり、他のマギステルたちが講義したのは実はパリにおいてであったこと、こ

の学派の人文主義の開花期は十二世紀の前半に限定されており、しかも同時代の他の聖堂学校でのそれと特段の差異はなく、おしなべて退嬰的、保守的で、パリを中心に潑剌たる文化を開花させた十二世紀ルネサンスのなかではさしたる意義は認められない、と言う。

このサザーンの所説に対しては、内外の研究者による批判がただちに公にされ[32]、それに応えて彼自身再度、自己の見解を表明している[33]（一九八二年）。そこに基本的な変更はなく、サザーン説への批判に関しても、既に基本的論点は明らかにされている以上、ここで繰り返す必要もなかろう。要するに、十二世紀を〈修辞から論理への転換〉と見なす彼の歴史認識と方法的パラダイムは十分に了解可能だとしても、シャルトル学派をもっぱら地縁的、制度的視点でのみ扱い、その存在を否定している点、またその人文主義を地方的で時代遅れの保守主義と断定して済ませている点に関しては、にわかに同意するわけにはいかない。大事なことは、シャルトルであれ、パリであれ、古典愛好の人文主義という〈精神類型〉が間違いなく十二世紀の前半に存在した事実は到底否定することはできないという点である。そうして、その最も代表的な知識人として、ソールズベリのジョンがいたのである。

では、ジョンにとって、古典とはいかなる意味と意義をもっていたのだろうか。『メタロギコン』――同様に『ポリクラティクス』も、であるが――を繙いてみれば、私たちはそこに信じられないほど夥しい数の、古代著作家とその古典作品が引用されているのに驚かないわけにはいかない。ただ、そうした引用文献をジョンがすべて読了していたのではなく、それらはしばしば当時用いられていた注釈書や文法書、詩華集や撰文集などからの引用に頼っていることは既に明らかにされているところである[34]。

だが、たとえそうであるとしても、ジョンが古典をこよなく愛し、古典から限りない知恵を汲み尽くそうとしたその姿勢を疑うことはできない。

「シャルトルのベルナルドゥスは我々をよく巨人の肩の上に乗っている矮人に準えたものであった。我々は彼らよりも、より多く、より遠くまで見ることができる。しかし、それは我々の視力が鋭いからでもなく、あるいは、我々の背丈が高いからでもなく、我々が巨人の身体で上に高く持ち上げられているからだ、とベルナルドゥスは指摘していた。私もまったくその通りだと思う。」(III, 4)

既に引用しておいた彼の有名な言葉であるが、クリバンスキーがつとに分析しているように[35]、ここにはシャルトル学派にとっての古代と現代との関係が見事に表現されている。つまり、そこには古代人の知恵と古代の崇高な遺産への尊敬の念が込められていると同時に、他方においてそうした遺産を自己のものとし、それを増大させている限り、自分たちはより優れた者たり得るとする堅い確信も窺われる。そして、これはまたジョン自身の深く得心するところのものでもあった。

さきに私たちは、人文主義者ジョンにとっての主要敵が、幅広い自由学芸の時間をかけた、地道な研鑽を軽蔑し、速成の技術的教育で自己満足する実利主義のコルニフィキウスの徒やソフィスト的弁証論者たちであったのを見てきた。サザーンの言を用いれば、彼らの存在と活動は〈修辞から論理への転換〉という時代の必然的な趨勢にかなう動きであったかもしれない。今日の中世史が明らかにしているように、十二世紀はまことに激しい社会変動の世紀であった。農業はさまざまな技術改良により飛躍的な進歩を示し、それに連動するかたちで都市の貨幣経済が活発化しはじめ、その渦は知の世界をも巻き込んでいった[36]。時代はもはや従来型の古典研究中心の人文主義教育では済ます、人々の関心は「いま、ここに」ある諸問題の即時的な解決に集中し、「古典著作家の学習は新しい諸大学のカリキュラムから消えていった[37]」のである。

だがそうであればなおのこと、ジョンの意識はそうした時代の流れに抗がうことになる。

「私はアカテメイアの徒(*accademicus*)であるから、哲学者にもよくわからないような問題については、私の言うこ

とが真実だなどと公言はしない。それが真実か否かは別として、真実に近いと思われることで満足する。」(prologus)

これはホイジンガがジョンの「穏健中正な立場」の証明として引用している言葉であるが[38]、いまそれを〈中庸〉(*sobria*) の精神と言い換えてもよいであろう。

確かに、彼がなによりも忌み嫌ったのは物事を深く思索することなしに、短兵急に極論に走り、大言壮語して少しも怪しまないような精神の傾向性であった。彼の眼に映る同時代のある人々は、こうした精神に骨の髄まで毒され、人類の貴重な遺産である古典を深く、静かに味わう心のゆとりを喪っているように思われた。そこに、生きる知恵としての中庸の精神の存在する余地はない。

「中庸の精神 (*sobria*) とは次のようなことを行う人のことである。すなわち、まずもって自己自身を十分に反省すること、自分よりも下の人たちを注意深く見ること、自分と同等の人たちに然るべき考慮を払うこと、自分よりも上の人たちに敬意をもって臨むこと、である。」(IV, 40)

このように語るとき、ジョンにとっては、この中庸の精神とは自己の認識そのものを意味していた[39]。

結

これまで『メタロギコン』を中心にジョンの学芸・教育論を一瞥してきた。そこに見られるのは、シャルトル学派の学風に培われた古典重視の人文主義であることは繰り返すまでもない。この人文主義はやがて世紀の後半には、台頭してきたパリの大学での新しい論理学（弁証論）の攻勢のまえに衰退し、消え去って行く運命にあった。

だが、いま私たちの関心は、そこにはない。私たちが知りたいのは何か。それは、〈巨人の肩の上に乗る矮人〉

とは、ジョンにとって誰のことを指していたのか、という問題である。

結論を急ぐようであるが、それはジョンが自分自身を言っていたのである、と私は思う。

「卑しむべき人間といって、自己認識を蔑む者以上の者はいない。」(*Policraticus*, I, 1)

これは『ポリクラティクス』のなかの一節であるが、彼が自己認識の重要性を指摘していたのはいま見てきた通りである。それは中庸の精神のなかで語られていたわけであるが、極論を廃し、現実の性急さから身を隔離して、古典の世界に親しみ、そこに真理に通じる真の叡知を見いだそうとする彼の人文主義的知性のありようは、まさに自己とは一体誰か、を尋ね求める道であった。

「真理に至る唯一の道は、謙遜(*humilitas*)である。」(*Metalogicon*, II, 6)と、ジョンは言う。謙遜、しかりキリスト教精神のコモンプレイスであるが、彼のここでの発言はけっしてたんなる常套句ではない。自分たちは古代の巨人に比して、あまりにも小さな存在にすぎない。しかし、この小人、矮人、侏儒は自らの卑小さを認識するだけの謙虚さを喪わず、古代の賢人の肩を借りて研鑽に勤しむことをハビトゥスとすれば、「より多く、より遠くを見ることができる」存在でもあるのだ。こうジョンは言っているのではないか。そう言えば、いささか衒学的な物言いになるが、ジョンは幼年時代を回顧して、自分のことを“*Johannes Parvus*”と表していたのである。[40]

(1) 『メタロギコン』のテキストは、C. C. J; Webb (ed), *Ioannis Saresberiensis Metalogicon Libri IIII*, Oxford, 1929. また、随時、マクガリーによる英訳を参照した。D. D. McGarry (trans.), *The Metalogicon of John of Salisbury. A Twelfth-Century Defense of the Verbal and Logical Arts of the Trivium*, Uninersity of California Press, 1955.

(2) 川上倫逸『巨人の肩の上で』未来社、一九九〇年。

(3) A・O・オルドリッジ「新旧論争」(『進歩とユートピア』平凡社〔ヒストリー・オヴ・アイディアズ叢書14〕、

一九八七年）一四三―一四四頁。

(4) このベルナルドゥスの比喩の解釈と、その解釈の歴史、とりわけそれをめぐる古代派・近代派の論争に関しては、古くからさまざまな論議がある。ここでは、R. K. Merton, *On the Schoulders of Giants*, New York and London, 1965. を挙げるにとどめる。

(5) ジョンは自分の生い立ちについて、『ポリクラティクス』や『メタロギコン』、『書簡』で断片的に語っている。彼の経歴を知るには、R. L. Poole, "John", in *The Dictionary of National Biography*, vol. IX&X, 1908-1913. pp. 876-883. idem, *Illustrations of the History of Medieval Thought in the Departments of Theology and Ecclesiastical Politics*, London, 1884, pp. 201-225. およびその第二版、idem, *Illustrations of the History of Medieval Thought and Learnning*, 1920, pp, 176-197. C. C. J. Webb, *John of Salisbury*, London, 1932 (r. p. New York, 1971) , pp. 1-21.

(6) *Epist*., 202, 300, 134, 121, 236, 238.『書簡』のテキストは、W. J. Millor, H. E. Butler and C. N. L. Brooke (eds.) , *The Letters of John of Salisbury*, vol. 1 (1153-1161), Oxford, 1986; W. J. Millor and C. N. L. Brooke (eds.). *The Letters of John of Salisbury*, vol. 11 (1163-1180), 1979.

(7) Policraticus, II, 28. なお、テキストは C. C. J. Webb (ed.), *Ioannes Saresberiensis Policraticus, sive de curialium et vestigiis Philosophorum Libri VIII*, 2 vols, Oxford, 1909.

(8) Carl Schaarschmidt, *Johannes Saresberiensis nach Leben und Studien, Schriften und Philosophie*, Leipzip, 1862.

(9) R. L. Poole, *op. cit* (1884), p. 206ff. (1908-1913) , p. 876. (1920), p. 180ff.

(10) J. A. Clerval, *Les Écoles du moyen âge* du Ve au XVIe siècle, 1895 (r. p. 1965).

(11) C. C. J. Webb (ed), *Metalogicon, op. cit*., p. 80, n. 1. idem, *John of Salisbury, op. cit*, pp. 5-6.

(12) C. C. J. Webb, *John of Salisbury, op. cit*., pp. 5-6.

(13) D. D. McGarry (trans.)., *The Metalogicon, op. cit*., p. 97, n. 172.

(14) C. H. Haskins, *The Renaissance of the Twelfth Century*, 1927, p. 373.〔野口洋二訳『十二世紀ルネサンス』創文社、一九八五年、三二六頁。別宮貞徳・朝倉文市訳『十二世紀ルネサンス』みすず書房、一九八九年、三〇九

頁〕

(15) R. W. Southern, *Medieval Humanism and Other Studies*, Basil Blackwell, 1970, pp. 61-85.

(16) 中世における七自由学芸については、David L. Wagner, ed., *The Seven Liberal Arts in the Middle Ages*, Indiana UP, 1983. が詳しい。邦語文献としては、岩村清太「中世における自由学芸」(上智大学中世思想研究所編『教育思想史Ⅲ 中世の教育思想 上』東洋館出版社、一九八四年)が参考になる。後注(28)も参照。

(17) C. H. Haskins, op. cit., p. 9. 野口訳、八一頁。別宮・朝倉訳、七四頁。

(18) ハンス・リーベシュッツは、『メタロギコン』のある一節(I, 5)の描写をもってコルニフィキウスの人物を特定することなどできないと言う。というのは、ジョンはコルニフィキウスをジョン自身の対極にある心性の代表者としてのみ描いているからである。筆者もまったく同感である。Hans Liebeshütz, *Medieval Humanism in the Life and Writings of John of Salisbury*, London, 1950, Appendix IV, p. 118.〔柴田平三郎訳『ソールズベリのジョン 中世人文主義の世界』平凡社、一九九四年。なお、この邦訳には、この「補論」の部分は訳されていない。〕

(19) C. C. J. Webb (ed.). *Metalogicon, op. cit.*, p. 8, n. 1. D. D. McGarry (trans.), *The Metalogicon, op. cit.* p., 11. n. 13. H. O. Taylor によれば、この解釈と、さらにクィンティリアヌスによって引用される修辞学者で、速成教育を説き、*Ad Herrenium* の著者とされる人物のどちらかであるという。*The Medieval Mind*, vol. II, 1966 (f. p. 1911), p. 159, n. 1.

(20) *Metalogicon*, I, 4.

(21) ibid., I, 24.

(22) より正確に言えば、全巻全体の「序文」と、第二巻、第三巻、四巻にそれぞれ「序文」があるので、全百一章になる。

(23) C. C. J. Webb, "Prolegomena", in idem (ed.), *Policraticus*, vol. I, p. xlviii.

(24) *Metalogicon*, Prologus. Cf. C. C. J. Webb (trans.) *Metalogicon, op. cit.*, "introduction", p. xxi. 柏木英彦「ソールズベリのヨハネスのグランマティカ論と人文教育の理念」(「慶応義塾大学言語文化研究所紀要」第三号、一九七二年、六三頁。同「人文主義の理念——ソールズベリのヨハネス」(『中世の春』創文社、一九七六年、一〇頁。田中峰雄「ヨアンネス・サレスベリエンシスの学芸観」(「史林」第五八巻第五号、一九七五年、六〇頁。のち同氏著

『知の運動』ミネルヴァ書房、一九九五年に収録）。

(25) C. C. J. Webb (trans.), *Metalogicon, op. cit.*, "introduction", pp. xxi-xxii. なお、『メタロギコン』に見られるジョンの学問体系については、甚野尚志「ソールズベリのジョンの学問観」（上智大学中世思想研究所編『中世の学問観』創文社、一九九五年）を参照。

(26) 柏木英彦、前掲論文、六三頁（一九七二年）、同、一〇頁。

(27) E. R. Curtius, *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Bern (Francke), 1954.〔『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一・岸本通夫・中村善也訳、みすず書房、一九七一年、一〇六頁。

(28) Martianus Capella, *De nuptiis Philologiae et Mercurii*, ed. Dick, A., Leipzig, 1925. マルティアヌス・カペラと彼以後の七自由学科の展開については、広川洋一「〈自由三学科〉の成立」（『新　岩波講座　哲学14）哲学の原型と発展』一九八五年）が参考になる。

(29) D. D. McGarry, "Educational Theory in the Metalogicon of John of Salisbury", *Speculum*, vol. XXIII, no. 4, 1948, pp. 659-675.

(30) C. H. Haskins, *op. cit.*, p. 101. 野口訳、八六頁。別宮・朝倉訳、七九頁。

(31) R. L. Poole, "John", *op. cit.*, p. 881.

(32) E. Jeauneau, N. M. Häring, P. Dronke, R. Giacone といった研究者たちによる批判が公表された。これらについては、ここでは一々列挙しない。サザーンによる再反論〔次注（33）の論文 p.113, n. 1.〕を見られたい。また、David Luscombe, "John of Salisbury in the Recent Scholarship", in M. Wilks (ed.), *The World of John of Salisbury*, Oxford, 1984, p. 24ff. P. Riche, "Jean de Salisbury et le Mond Scolaire du XII siècle", in M. Wilks, *ibid.*, p. 44ff. も参照。我が国では、鈴木成高「シャルトル・ルネサンス」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要」一九輯、一九七四年。三上朝造「シャルトル学派とその周辺――12世紀の人文主義」（「史学」第四八巻第三号、一九七七年。柏木英彦「中世のヒューマニズム」（「慶応義塾大学言語文化研究所紀要」第十一号、一九七九年。

(33) R. W. Southern, "The Schools of Paris and the School of Chartres", in R L. Benson and G. Constable, eds., *Renaissance and Renewal in the Twelfth Century*, Harvard UP, 1982, pp. 113-137.

(34) D. D. McGarry (trans.), *Metalogicon, op. cit.*, "introduction", pp. xxiii-xxiv. に引用作家・作品のリストが

ある。あわせて、idem, “Educational Theory……”, *op. cit.*, p. 661ff. Janet Martin, “John of salisbury as classical scholar”, in M. Wilks, op. cit, pp. 179-202. 田中峰雄、前掲論文、七五頁。

(35) Raymond Klibansky, “Standing on the Shoulders of Giants”, *Isis*, Vol. XXVI, 1936, pp. 147-149. idem, “The School of Chartres”, in M. Clagett, G. Post and R. Reynolds, eds., *Twelfth-Century Europe and the Foundations of Modern Society*, The University of Wisconsin Press, 1966, p. 5.

(36) たとえば、ジャック・ルゴフ『中世の知識人』柏木英彦・三上朝造訳、岩波書店（新書）、一九七七年、八頁以下。

(37) C. H. Haskins, *op. cit.*, p. 98. 野口訳、八三頁。別宮・朝倉訳、七六頁。

(38) J. Huizinga, “Een praegothieke geest : Johannes van Salisbury”, in De taak der cultuurgeschiedenis.〔ホイジンガ「前ゴシック精神の人、ソールズベリのジョン」（里見元一郎訳『文化史の課題』東海大学出版会、一九六五年）、一三一頁。のち『ホイジンガ選集4ルネサンスとリアリズム』一九七一年に収録〕。ホイジンガはさらにジョンの穏健中性な立場の証明として、彼が“forte（多分）”という言葉を多用している点を挙げている。同、一四五頁。また、〈中庸〉の精神について、田中峰雄、前掲論文参照。ここで田中氏は『教皇史』(*Historia Pontificalis*) での叙述を分析して、ジョンの中庸の精神を明らかにしている。なお、ジョンにおいては、この精神は政治的徳性 (*virtus*) でもあり、「叡知」や「正義」と結合している。この点については、拙稿「ソールズベリのジョンとアリストテレス――政治的徳性（virtus）をめぐって――」（「法学研究」第六七巻第十二号、一九九四年）を参照されたい。

(39) 同じく、*Metalogicon*, IV. 40. でジョンは学問（知）の最終目的が「自己認識」にあることを強調している。「自己自身を知ること (*se nosse*) は、アポロンが語ったように、最高の叡知 (*summa sapientia*) である。」

(40) 念のために言うが、この“*parvus*”という表現について、ジョンは“*parvum nomine, facultate minorem, minimum merito*”, すなわち *little in name, less in skill, least in worth* という意味で語っている。*Epist.* 212. cf. R. L. Poole, *op. cit* (1884), p. 201. idem, *op. cit* (1908-1913) ., p. 876. idem, *op. cit.*, p. 176. W. J. Millor and C. N. L. Brooke (eds.). The letters of John of Salisbury, vol. II, op. cit.